

第11部会

して論じられるべきであり、「超越と世俗とをめぐる宗教的世界観の変遷」の一局面として把握することが可能だと考えられるのである。

こうした観点から日本の前近代に目を移してみると、注目されるのは佐藤弘夫の研究である。佐藤はまず「神」概念の時代的な変容と、仏教と神々との全面的な習合とを指摘する。そして、本地垂迹説に注目することで、中世日本の神国思想が、仏教的コスモロジーの下で仏が神として垂迹する末法辺土の「神国日本」と、世俗の認識を超えた彼岸／他界／普遍とが結びつけられて「世界」を構成するものであることを見出す。その意味で中世神国思想とは、トランスナショナルな仏教的普遍世界の下に、世俗的でナショナルな「神国日本」を位置づけるものであった。したがって、そのような普遍的超越もしくは彼岸世界の絶対性・最高性が失われることこそ、中世という時代の転換を意味することになる。

いっぽうで、近代的な神国思想に基づく近代国体論の研究によつて照射される範囲は、しばしば近世にとどまり、中世まで及ぶことは少ない。逆に、中世日本からなされる思想史的研究の照射範囲も、いくつかが注目すべき研究はあるにせよ、しばしば近世以前にとどまり、近代にまで及ぶことは少ない。したがって、中世日本社会の諸相が日本近代へとどのように受け継がれ、いかなる連続と断絶において関係づけられるのか。さらに、近代のウェスタンインパクトと、前近代と近代を貫く日本思想史の系譜とが、近代においてどのような関わり合いを持ちつつ、近代日本国家を作り上げたのか。そのような論点につい

ては、未開拓の領域が未だ多く残されている。そうした研究領域を開拓するに当たっては、政治学的な主権論を「超越と世俗とをめぐる宗教的世界観」の問題として捉えかえしていくという、本論で検討してきた認識視座が、ひとつの示唆となるのではないだろうか。

チベットに伝わった

スマーガダー・アヴァダーナ

梶 濱 亮 俊

チベットから出版された著書に、サキヤパンディタ（二一八二—一二五二）が著作した『サキヤ・レクシエ』がある。この注釈書にマルトン・チオゲエル（二三世紀）が著作した『サキヤ・レクシエの注釈書』がある。本書は、『薩迦格言及注釈』として西藏人民出版社（一九九〇年六月）から出版されている。本書の第二番目の格言の偈頌は、サキヤパンディタが著作した『サキヤ・レクシエ』の第一番目の偈頌が転載されたものである。この偈頌を和訳すると次のようになる。

賢い人は、いくら知識の蔵を持っていても

さらに、貴重な格言を収集する。

大海は、水の蔵であるがために、

すべての川の水が流れ込んでくる。

『サキヤ・レクシエの注釈書』の中で、サキヤパンディタの

弟子の一人であったマルトン・チオゲエル（一三世紀）は、この格言の偈頌と同じ教えを持つ説話の文章を師・サキヤパンデイタに確認を取り、転載している。

著者の研究の結果、マルトン・チオゲエルがこの『サキヤ・レクシエ』の格言の偈頌に対して転載した説話は、影印 北京版『西藏大蔵経』第四〇巻No.一〇一五の *Ma ga dha bzari mohi rtogs pa brjod pa*、即ち、スマーガダー・アヴァダーナ (*Sumāgadhā avadāna*) であることが理解できた。

次に、北京版『西藏大蔵経』第四〇巻No.一〇一五をマルトン・チオゲエルがどのように要約して『サキヤ・レクシエ』の注釈書』に書いたのであろうか。『西藏大蔵経』の説話を説明しながら『サキヤ・レクシエ』の注釈書』と異なる箇所を説明していく。

むかし、シュラーヴァステイに仏陀が住んでいた。アナータピンダタの娘のスマーガダーも住んでいた。スマーガダーはジャイナ教徒のヴリシャバダッタと結婚して、南方の国のプンドラヴァルダナの町に行って住む。しかし、スマーガダーはその家でジャイナ教の僧侶たちを見て「これらの僧侶は尊敬する人々ではない。仏陀様が尊敬する人です」と言う。夫の家族は仏陀をこの町に招待する。これに対し『サキヤ・レクシエ』の注釈書』では、その町でスマーガダーは悲しい顔をしていた。親戚の者たちはスマーガダーに「あなたは、なぜ、悲しい顔をしているのか」とたずねる。スマーガダーは「ここには喜捨の畑がないから悲しいのです。喜捨する人は、仏陀様です」と答える。そのため夫の家族は仏陀をこの町に招待する。次に、仏陀

と神通力を備えた十三人の仏陀の弟子たちが神通力を示しながらシュラーヴァステイからプンドラヴァルダナの町にやって来る。仏陀はこの町でスマーガダーをはじめ、多くの人々に仏法を説法し、この町に住む異教徒を仏教徒にした。

この格言の偈頌に言う賢い人は、この説話ではスマーガダーである。スマーガダーは賢かったけれども、さらにプンドラヴァルダナの町に仏陀を招待して仏陀の説法を聞いた。

『プーサンナパダー』に引用される 『八千頌般若経』

庄 司 史 生

バーミヤーン出土般若経写本（二―三世紀頃）は、現存『八千頌般若経』（以下『八千頌』）に比定されるものの、それ自体に偈頌数の明記はなく、その時点では偈頌数による「般若経」の分類が意識されていなかったものと考えられる。その後、梵本が現存する『佛母般若波羅蜜多圓集要義論』（陣那、五世紀）に「八千〔頌〕」の語が見出され（第六偈）、経録では『開元錄』（智昇、八世紀）に「梵文八千頌」（『大正蔵』五十五卷595a-b）、藏文では九世紀の『デンカルマ』（ラルー・芳村No.5）『パンタンマ』（川越No.5）に「八千頌」という記載を確認することができる。このように、偈頌数によって「般若経」の分類が行なわれ、「般若経」と名づけられる經典群の中